報告書もくじ

開　会 …… 2
２０年のあゆみ紹介 …… 6
「阿武隈川フォトコンテスト２０１４」表彰式…． 9
記念講演 …… 11
クロストーク …… 24

20 周年記念講演会＆「阿武隈川フォトコンテスト 2014」表彰式

プログラム

■開　会

〇主催者挨拶　阿武隈川サミット実行委員会　委員長　福島市長　小 林　香

〇来 賓 祝 辞　福島県知事　佐 藤 雄 平　様

国土交通省東北地方整備局河川部長　鈴 木 研 司　様

■２０年のあゆみ紹介

■フォトコンテスト表彰式（入賞作品スライドショー）

〇亀工房による生演奏、フォトコンテスト入賞作品の上映

〇受賞者（２１名）へ表彰状の授与

■記念講演～人と自然の共生を考える～『湧き水の町との出会い』

＜講師＞ 今 森 光 彦 氏 （写真家）

～出演者紹介～

☆今森　光彦氏

1954 年、滋賀県生まれ。写真家。琵琶湖をのぞむ田園風景の中にアトリエを構え活動する。自然と人との関わりを「里山」という空間概念で追い続ける。また、自然のかたちをハサミひとつで鮮やかに切り出すペーパーカット作家としても知られる。写真集に『里山物語』(新潮社)、『湖辺』(世界文化社)、『世界昆虫記』(福音館書店)、『里山を歩こう』(岩波書店)など数多くの著書がある。第 20 回木村伊兵衛写真賞、第 28 回土門拳賞、小学館児童出版文化賞など数多くの賞を受賞。

☆亀工房

ギターとハンマー・ダルシマーの音楽デュオ。「ハンマー・ダルシマー」は中近東を起源にヨーロッパで生まれたピアノの原型ともいわれる打弦楽器。台形の胴に張られた数十本の弦を木製のバチで叩く演奏は、日本ではまだ聴く機会が少ない。「亀工房」は、そんなハンマー・ダルシマーの澄んだ響きをアコースティック・ギターの温かい音色で包みこむ他にはないサウンドが魅力。1992 年の結成以来、北海道から九州・沖縄、また離島まで、日本各地で「心地よい音楽」をモットーにライブ活動を続けている。

開　会

司会　それでは皆様、大変お待たせいたしました。只今より、「阿武隈川サミット20周年記念講演会」を開会いたします。本日司会進行をつとめさせていただきます高橋ゆうこと申します。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに、この度の講演会に、多数の皆様に御参加いただきましたことを、関係者一同心より御礼申し上げます。「阿武隈川サミット」は、福島県と宮城県の阿武隈川沿川の市町村が連携し、次世代に残す財産として、より良い河川環境を伝えていく、という理念に基づいて平成６年から開催してまいりましたが、今年で20周年の節目を迎えるにあたり、阿武隈川の魅力の再発見と、環境保全や景観形成の啓発を目的に今回の講演会を開催することといたしました。

ここで、本日の日程をお知らせいたします。これより主催者からの挨拶・来賓祝辞の後、「阿武隈川サミット20年のあゆみ」をご紹介いたします。その後、今年行われました「阿武隈川フォトコンテスト2014」の表彰式を行い、休憩を挟みまして、今森氏をお迎えし、講演を拝聴いたします。全体で約２時間強にわたるイベントとなります。どうぞ宜しくお願いいたします。

それでは、阿武隈川サミット実行委員会の主催者であります　福島市長小林香より、皆様にご挨拶を申し上げます。

主催者　福島市副市長の安斎睦男でございます。小林市長が一昨日から山口、それから大分の方に出張しておりますので、私からご挨拶を代読させていただきます。

福島市副市長　安斎睦男

本日は、「阿武隈川サミット 20 周年記念事業」として、「阿武隈川フォトコンテスト 2014」表彰式ならびに「20 周年記念講演会」を開催いたしましたところ、大変多くの皆様にご参加をいただきまして誠にありがとうございます。また、国土交通省東北地方整備局鈴木河川部長をはじめ、ご来賓の皆様、そして当サミットのアドバイザーをお願いしております、国、福島県、宮城県の関係部局の皆様方には、本日は大変ご多忙のところ、ご臨席を賜り厚く御礼を申し上げます。

阿武隈川サミットは「母なる川阿武隈川」をよく知り、川との共生を目指しながら、地域の実態に即した治水・利水計画との調和を図り、河川環境保全を推進するため、平成 6 年に福島・宮城両県の沿川市町村によって設立したものでございます。沿川の市町村長が一堂に会した第１回サミットの開催以来、これまで「源流探検」や「河口クリーンアップ作戦」、「リバースクール」など様々な事業を展開することによって、河川環境の保全や啓発に努めてまいりましたが、この間の取り組みの成果が認められ、本年８月には当実行委員会が「水資源功績者表彰」を受賞いたしました。今回の受賞は流域の多くの関係機関、団体の皆様のご理解とご協力の賜物であり、これまでの皆様方のご尽力に対しまして、深く敬意と感謝を申し上げる次第で

ございます。

今後とも沿川市町村が連携し、共通の財産として阿武隈川の良好な河川環境を次世代に残し伝えるための活動を続けてまいりたいと考えておりますので、引き続きご理解とご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

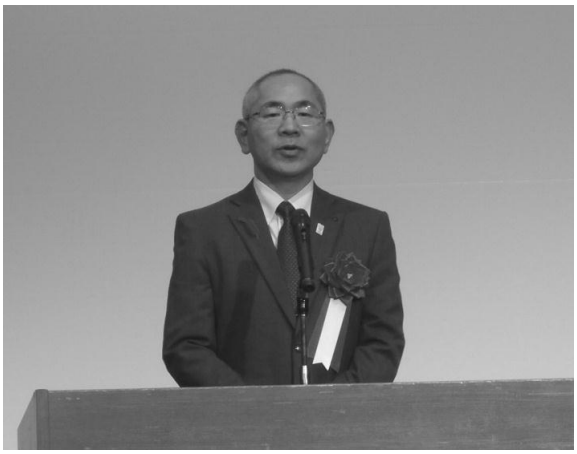
また、昨年に引き続き2回目となります「阿武隈川フォトコンテスト」には今年も多くの素晴らしい作品が寄せられました。福島県写真連盟鳴原会長をはじめ審査員の皆様には、阿武隈川の魅力の再発見に繋がる心に残る作品をお選びいただき、ありがとうございました。そして後ほど、表彰式を行いますが、受賞されます皆様方、誠におめでとうございます。心からお祝いを申し上げますとともに、今回の受賞を契機としてさらに精進されご活躍されますことをご祈念申し上げます。さらに本日は20周年記念講演として写真家の今森光彦様から「～人と自然の共生を考える～『湧き水の町との出会い』」と題してご講演をいただきます。

本日の講演会を通して、人と水との関わり方を知り、理解を深めていただくとともに、我々の母なる川阿武隈川が皆様に、より身近で親しみのある存在となるきっかけとなることをご期待申し上げまして、主催者を代表してのご挨拶といたします。

平成26年10月26日阿武隈川サミット実行委員会委員長福島市長小林香、代読でございます。本日は皆様よろしくお願いいたします。

司会　本日は、ご来賓として福島県知事様、国土交通省東北地方整備局河川部長様、にご臨席いただいておりますのでご祝辞を賜りたいと存じます。はじめに、福島県知事　佐藤雄平様に御祝辞を頂戴いたします。

来賓（福島県土木部長）　本日は知事の出席がかないませんでしたので、私から代わってご挨拶いたします。



福島県土木部長　松本英夫　様

「阿武隈川サミット20周年記念講演会」の開催にあたりご挨拶を申し上げます。本日、宮城、福島両県の阿武隈川沿川の市町村の皆様が一堂に会し、本記念講演会が開催されますことを心からお喜び申し上げます。

また、「阿武隈川フォトコンテスト2014」において入賞された皆様、誠におめでとうございます。

改めて申し上げるまでもございませんが、河川は、良好な景観・親水・レクリエーション空間の創出・動植物の生息環境などとともに、水道や農業用水など、人間の生活に欠かすことのできない水資源の供給という面におきましても極めて重要な役割を果たしております。

一方、ひとたび洪水が発生すれば、大きな被害となる危険性が高いことも事実でございます。特に近年、気候変動等の影響によると思われる台風やゲリラ豪雨などによって、全国各地で洪水や土砂災害が頻発しております。

阿武隈川におきましても、平成23年台風15号による被害が記憶に新しいところでありますが、県といたしましては、迅速な災害復旧はもとより、ハード・ソフト事業を適切に組み合わせた、防災・減災対策を積極的に推進していくとともに、県民の皆様の防災意識の一層の向上にも取り組んで参りたいと考えております。

本サミットの目的には、「次の世代に共通の財産として良好な河川環境を引き継ぐ」とあり

ます。治水・利水・そして環境の保全。将来の姿を見据えながら、これらのバランスの取れた河川環境の保全・創出に向け、本日の記念講演会が１つのきっかけになることをご期待申し上げます。

結びとなりますが、震災から 3 年半ほどが経過いたしました。今なお、12 万人を越える県民が避難を続け、風評も根強く残る中、国内外からのご支援、そして県民の皆様の頑張りによりまして、着実に元気を取り戻しております。県といたしましては、「ふくしま新生プラン」に基づき、防災・減災の街づくりをはじめ、復興に向けた取り組みを全力で進めてまいりますので、引き続きご支援、ご協力をお願いいたします。

ご参会の皆様の益々のご健勝、ご活躍を心よりお祈り申し上げ、お祝いの言葉といたします。

平成 26 年 10 月 26 日福島県知事佐藤雄平、代読でございました。

本日はどうもおめでとうございます。

司会　つづきまして、国土交通省東北地方整備局河川部長　鈴木研司様に御祝辞を頂戴いたします。

来賓（国土交通省東北地方整備局河川部長）

ご紹介いただきました、国土交通省東北地方整備局河川部長の鈴木でございます。

本日は、「阿武隈川サミット 20 周年記念事業」そして「記念講演会」のご盛会、誠におめでとうございます。また常日頃、ご参会の皆様方には国土交通行政なかんずく河川行政に対しましてあたたかいご支援とご協力をいただき、改めまして感謝申し上げます。

さて、本日が阿武隈川サミット 20 周年ということでございまして、平成 6 年から阿武隈川の沿川の首長さんが集まって、地域交流、上下流交流あるいは、左右岸交流などの活動を 20 年前からされてきたということに対しまして、

国土交通省東北地方整備局河川部長　鈴木研司　様

歴代の市町村長さん、そして市町村役場のご担当の方々、そして地域の皆様方や関係する皆様方に対しまして深く敬意と感謝を申し上げます。

阿武隈川は、この 20 年の間にも平成 10 年、平成 16 年、平成 23 年、25 年に大きな水害がございました。阿武隈川の直轄管理区間は、国土交通省が管理していますが、福島県側が福島河川国道事務所、宮城県側が仙台河川国道事務所という事務所が河川改修あるいは河川管理を行っています。これまでも地道に河川改修あるいは遊水地の整備を進めてまいりましたが、残念ながら水害を完全に押さえ込むまでには至っていません。そしてまた、最近では、東北でも雨の降り方が昔と変わってきたのかもしれません。水害を抑えるためのハード整備はそう簡単にはできないですが、これからは、ハード整備とともにソフト面の充実が重要であります。例えば、ハザードマップ、あるいは予警報システムの充実などです。最近は、避難勧告や指示などの情報伝達において、特に市町村長さんの役割・責任が大きくなっています。私ども国土交通省といたしましても、県、市町村の関係機関の担当者と連携しまして、地域の皆様方がより安全で安心して暮らせるようにこれからも努力を進めてまいりたいと思います。

最近では「タイムライン」という言葉が出てきました。水害が起こる 1 時間前、2 時間前、

6 時間前、1 日前、2 日前などの時点で、水害が起きることを防ぐための準備をする行動計画を定めておくというのが「タイムライン」でございまして、今、阿武隈川におきましても、沿川市町村と国土交通省と県が一緒になって取り組もうとしております。これからも地域の皆様のご理解とご協力のもとに、国土交通省は関係の機関と水害を少しでも治めるための施策を取り組んでまいりたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

とはいえ、水害だけが川ではございません。もちろん、阿武隈川は、元来が綺麗で美しい川でございます。東日本大震災以降、地域の方々の足が若干遠のいているとお伺いしています。1 日も早く昔のような美しい豊かな阿武隈川になるように、これからも地域の皆さんのご支援とご協力をいただきながら、そして関係の市町村、県、関係機関の皆様方のご協力をいただきながら進めてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりますが、本日の記念事業の実施にあたりましてご尽力いただきました関係機関の皆様方、関係各位の皆様方、深く敬意とご感謝を申し上げますとともに、このサミットがこれからも発展継続していくこと、そして、阿武隈川がより皆さんに親しまれ、安全で強くて美しい川になりますことをご祈念申し上げて、私のお祝いの挨拶といたします。本日は大変おめでとうございました。

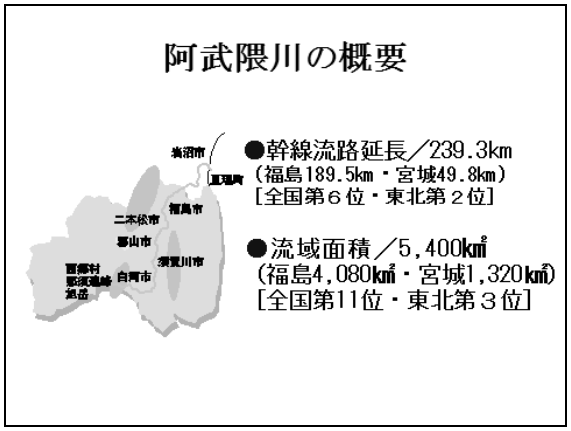
司会　ありがとうございました。では、ここで、あらためまして、本日お越しいただきましたご来賓の皆様とサミットアドバイザーの皆様、また、フォトコンテストの審査員をつとめられました皆様、並びに本日出演されます講師、演奏を担当する皆様を御紹介いたします。

福島県土木部長　松本英夫様、
国土交通省東北地方整備局河川部長
鈴木研司様、
国土交通省東北地方整備局
福島河川国道事務所長　永尾慎一郎様、
国土交通省東北地方整備局
仙台河川国道事務所技術副所長　栗田信博様、
福島県企画調整部土地・水調整課長
大楯一夫様、
福島県生活環境部水・大気環境課
主幹兼副課長　志田義美様、
福島県河川整備課長　猪狩英二様、
宮城県土木部河川課部
技術参事兼技術補佐(総括担当)　菅野洋一様、
福島県写真連盟会長　鴫原明寿様、
同じく副会長　清野文彦様、
同じく事務局長　黒岡隆様、
記念講演会の講師　今森光彦様、
スライドショーの際に演奏されます、
亀工房のお二人　です。
本日はどうぞよろしくお願いいたします。

２０年のあゆみ紹介

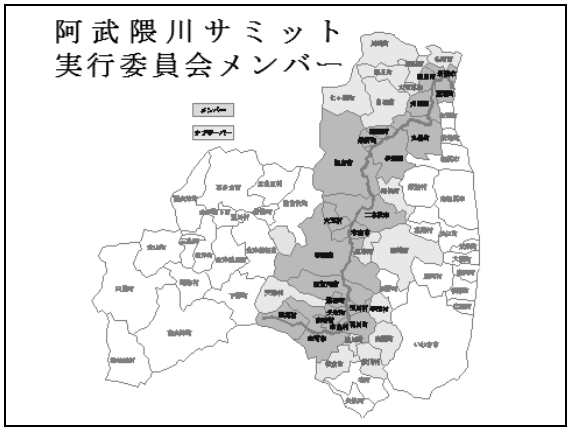
司会　それでははじめに、スクリーンにて、「阿武隈川サミット 20 年の歩み」の紹介をいたします。

まず、阿武隈川について簡単にご説明いたします。阿武隈川は全長　239.3Km　で、全国で６番目東北では北上川に次ぐ長さの河川です。



流域面積は　5,400K ㎡　で北上川、最上川についで東北で第３位となっています。阿武隈川の源流は西郷村の那須連邦の甲子旭岳から東へ流れ、福島県の中通りを北上して流れています。宮城県では、丸森町で角田盆地を通り、岩沼市と亘理町の境で太平洋に注いでいます。

次に、阿武隈川サミットを構成するメンバー市町村を紹介します。源流の西郷村から河口の



宮城県亘理町まで、沿川の自治体、福島県の「７市５町５村」と宮城県の「２市３町」で合計 22 市町村がメンバーとなっています。このほかに、アドバイザーとして、国土交通省の福島河川国道事務所様、仙台河川国道事務所様、福島県・宮城県の皆様にもご参加いただき、また、流域の 16 の市町村にもオブザーバーとしてご参加をいただいております。これは、メンバーを地図で色分けしたものです。地図で見ますと、阿武隈川流域の大きな運命共同体となっていることが分かると思います。

この阿武隈川サミットは、平成６年 10 月に、「阿武隈川をよく知る」「阿武隈川との共生を目指す」「流域それぞれが治水利水計画の調和を図る」「河川環境保全（環境を守る）を推進する」の４つの目的により開催することとなりました。当時、都市化などによる阿武隈川と人々との関わりに大きな変化が生じており、治水、利水、河川環境の保全などが、重要な問題となっていました。

次に、阿武隈川サミットについて説明いたします。平成６年に、第１回目の阿武隈川サミッ

トを開催しましたが、先ほど説明したメンバーの市町村長が一同に会し、治水・利水・環境保全などの観点から阿武隈川の現状などの共通認識を深め、流域の連携を図って参りました。

第１回から第７回までのサミットのテーマは主に「母なる川、阿武隈川との共生をめざして」としてサミットを開催しました。各市町村の治水・利水・河川環境の取組みの現状と課題について、流域自治体が何をなすべきかについ

て、行政と流域住民が連携を持ってなすべきものは何かなどについて意見交換を行いました。

平成 10 年に開催した第５回のサミットでは、「阿武隈川との共生憲章」が決議されました。

平成 12 年に開催した第７回サミットでは、阿武隈川水系の市町村が「阿武隈川流域 2000 年宣言」を発表し、21 世紀に向け、共通の財産である阿武隈川の保全などを行政・住民がどのような役割を担って行動するか確認しました。

第８回、第９回はテーマを「東北直轄 11 河川　水質ワースト１からの脱出」として、阿武隈川の水質改善をメインテーマとし、河川の現状認識、流域一体となった活動、生活排水対策に取り組むなどの行動決議を行いました。

第 10 回では、10 周年記念事業を行うと同時に、10 年間のこれまでの成果と今後の方向性について話し合われました。第 11 回以降は主に、「防災」をテーマに、災害の防止・住民の避難行動のための取り組みと課題、阿武隈川流域全体に関わる集中豪雨等の課題について議論しました。東日本大震災以降に行った第 14 回サミットでも、「阿武隈川流域防災力の向上～災害から生命を守るために」をテーマに市町村による討議を行っています。なお、サミットの詳しい内容については、阿武隈川サミット公式ホームページに掲載しておりますのでぜひご覧ください。

これまでの成果

「あぶくま川の詩」制作発表	平成８年度
上中下流児童交流会	平成８年度～１３年度
「河川環境－私の主張」	平成９年度
マスコット「あぶたん」発表	平成１０年度～１１年度
河口クリーンアップ作戦	平成１３年度～２２年度
リバースクール	平成１３年度～２２年度
源流の里植樹会	平成１３年度
阿武隈川サイクリング大会	平成１３年度

「あぶたん」

つづいて、阿武隈川サミット関連事業の紹介をいたします。サミットというと市町村長が集まって討議を行うイメージですが、実は、それ以外にも多くの事業を行っています。画面にマスコットの「あぶたん」の絵がありますが、これも公募で制定しています。ほかにも、「阿武隈川の詩」の制作、環境啓発グッズの製作、子どもたちを中心に行った「源流探険」などの様々な川に親しむ事業を実施しておりますが、次は、その一部をご紹介いたします。

カヌー駅伝

「カヌー駅伝」は民間団体の方々との共同で平成19年度から21年度まで３回開催しました。駅伝形式での競技で、二日間にわたり、18 歳以上の選手が３人一組となり福島市渡利の水辺の楽校から宮城県亘理町の亘理町船着場まで、約 75 キロの区間を８つの中継地点を経てゴールを目指す大会です。平成 21 年度には、20 チーム、175 名の参加がありました。

リバースクール

次に、「リバースクール」ですが、平成 13 年から22年まで10回にわたり二日間の日程で流域市町村の小学生を対象に行っていました。平成22年には72名の参加により福島県二本松市の「ウッディハウスとうわ」で実施しました。

阿武隈川の水質検査のほか、カヌー・Ｅボート乗船体験、宿泊交流などを行いました。

河口クリーンアップ作戦

次に、「河口クリーンアップ作戦」ですが、宮城県亘理町で平成 13 年から平成 22 年まで 10 回にわたり阿武隈川河口のゴミ拾いを行ってきた事業です。毎回、小学生や地域の方など多くの方に参加いただき開催されました。

源 流 探 険

「源流探険」は、福島県西郷村にある阿武隈川の源流近くの遊歩道の散策を行う事業です。平成 14 年から 22 年の間に 7 回行いました。震災の影響で開催を見合わせていましたが、25 年 10 月に、流域市町村の小学生 113 名の参加をいただき開催しました。震災以降子どもたちを対象に行った唯一の事業です。

こちらの写真は阿武隈川の魅力の再発見と、良好な河川環境を流域の共通の財産として次世代へ継承することを目的に昨年から開催しました、「阿武隈川フォトコンテスト 2103」の最優秀作品です。99 名の方から 208 点の応募があった中から選ばれました。撮影場所は宮城県の丸森町です。なお、今回の「フォトコンテスト 2014」作品の紹介は後ほどスライドショーで紹介いたします。

フォトコンテスト２０１３入賞作品

「阿武隈川の夜明け」

以上、阿武隈川サミットのこれまで行ってきた関連事業について簡単に説明いたしました。終わりになりますが、これまで、沿川市町村の首長による、「サミット討議」のほか、「リバースクール」、「源流探険」、「河口クリーンアップ作戦」、「フォトコンテスト」など、子どもたちをはじめ多くの方々の参加をいただきながら事業を進めてまいりました。この間、流域の多くの機関・団体との連携、多くの皆様の事業へのご支援・ご協力により、サミットの目的である　治水・利水・河川環境保全に大きな成果を上げることができました。

今年８月には、これらの取組みが認められ、国土交通大臣より「水資源功績者表彰」を受賞いたしましたが、これも、流域の多くの機関・団体との連携、多くの皆様の事業へのご支援・ご協力の賜物であり、改めて感謝申し上げます。

簡単ではありますが、以上で説明を終了いたします。

「阿武隈川フォトコンテスト2014」表彰式

司会　つづきまして、これより、「阿武隈川フォトコンテスト2014」表彰式を執り行います。まず、今年受賞いたしました作品についてスライドショーでご覧いただきます。スライドショーは生演奏とともにご覧いただきますが、ここで演奏いただく亀工房を紹介いたします。亀工房はヨーロッパで生まれたピアノの原型ともいわれる打弦楽器「ハンマー・ダルシマー」と「ギター」の音楽デュオです。北海道から九州・離島まで、日本各地で「心地よい音楽」をモットーにライブ活動をしているほか、テレビCMやNHKドキュメンタリー番組への挿入音楽などの音源制作等も行っています。それではよろしくお願いいたします。

（スライドショーに合わせ亀工房のお二人による生演奏）

司会　「阿武隈川フォトコンテスト 2014」は、応募総数 176 点の作品が寄せられた中から、最優秀賞１点、優秀賞２点、準優秀賞３点、入選 15 点が決定いたしました。本日は、その栄誉をたたえ、表彰状授与並びに記念品を贈呈させていただきます。

それでは、これより受賞されました方のお名前をお呼びいたしますので、その場でご起立ください。

最優秀賞 佐々木俊昭様、優秀賞 安斎正秀様、準優秀賞　佐藤源策様、同じく　星勝治様、同じく　浦山博喜様、入選　石原三雄様、同じく　渡部幸一様、同じく　寺島脩二様、同じく　小檜山裕行様、同じく　遠藤英次様、同じく　河野利光様、同じく　石津節男様、同じく　市川明様、同じく　菅野美子様、同じく　藁谷六朗様、同じく　斎藤竹男様、同じく　吉井勝美様、同じく　佐藤良一様、同じく　岩下一男様、同じく　清野善男様、

なお優秀賞の齋藤俊典様は都合により欠席しております。以上の皆様が受賞者の方々です。

それでは、受賞されました皆様を代表しまして、最優秀賞を受賞されました佐々木俊昭様に賞状の授与を行いますので、ご登壇ください。

（賞状授与）

司会　ここで、最優秀賞を受賞されました 佐々木俊昭様より受賞者を代表いたしましてスピーチがございます。よろしくお願いいたします。

佐々木氏　この度、賞をいただきまして、誠にありがとうございます。主催者並びに、関係者の皆様方に、厚く御礼申し上げます。私の写真は、二本松市の稚児舞台展望台から、満開の桜の下を流れる、絶景を撮影いたしました。これ

受賞者代表 佐々木俊昭 様 スピーチ

福島県写真連盟会長　鴫原明寿 氏

からも、母なる川「阿武隈川」を大切にして、魅力ある写真を撮ってＰＲしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。本日は誠にありがとうございました。

司会　「阿武隈川フォトコンテスト2014」の審査員長であります福島県写真連盟会長の鴫原明寿様より、講評をいただきたいと存じます。

鴫原会長　ご紹介いただきました鴫原でございます。審査員を代表して一言講評を述べさせていただきます。

2014 年、阿武隈川フォトコンテスト入賞者の皆様、本日は誠におめでとうございます。昨年に引き続きまして審査をいたしました者として、素敵な作品を沢山応募下さいまして、本当にありがとうございました。

審査にあたっては、昨年とはまた違った切り口で応募された作品など審査員一同新たな発見をしたところです。

当フォトコンテストの趣旨を理解下さる方々の作品に込める思いが伝わってきました。

阿武隈川の上流、中流、下流には、様々な変化に富んだ流れや景色があります。

応募する皆さんが、水との共生やその重要さ、そしてふれあいの場などを意識して作品づくりをして下さっていることに対し、大変嬉しく思っています。

グランプリに輝きました佐々木さんの春爛漫の季節から、菅野さんの白鳥の飛来地に見るように冬景色に至るまで、四季折々の作品があり、朝夕のおりなす霧景や夕景、桃源郷を蛇行する曲線美、舟下りやカヌー競技、花火大会、飯野町の堰堤など生活に密着した作品と水との共生が目立ちました。

そして斎藤さんや星さんの作品のように、丸森町や角田市の下流でのスケールの大きい作品も多く見られました。

どうぞ、皆さんのその素晴らしい感性で阿武隈川のさらなる魅力を発信していただきます事をご祈念申し上げまして、講評とさせていただきます。

司会　ありがとうございました。以上をもちまして、「阿武隈川フォトコンテスト2014」表彰式を閉じさせていただきます。

（終了後記念撮影）

※フォトコンテスト入賞作品については阿武隈川サミットホームページをご覧ください。（http://abutan.jp/）

記念講演

テーマ「～人と自然の共生を考える～『湧き水の町との出会い』」

講　師　今森 光彦　氏（写真家）

司会　皆様、大変お待たせいたしました。ただいまから記念講演を始めてまいります。

まず、これから講演を行なっていただきます講師を御紹介いたします。

講師は、写真家の今森光彦様です。今森光彦様は、1954 年滋賀県生まれ、琵琶湖をのぞむ田園風景の中にアトリエを構え活動。自然と人との関わりを「里山」という空間概念で追い続けています。また、自然のかたちをハサミひとつで鮮やかに切り出すペーパーカット作家としても知られています。

写真集に「里山物語」、「湖辺」、「世界昆虫記」、「里山を歩こう」など数多くの著書があり、また、「第 20 回木村伊兵衛写真賞」、「第 28 回土門拳賞」、「小学館児童出版文化賞」など数多くの賞を受賞されています。

本日は、「～人と自然の共生を考える～『湧き水の町との出会い』」をテーマにお話していただきます。では、早速、御登場いただきましょう。今森さま、宜しくお願いいたします。

今森氏　阿武隈川サミット 20 周年どうもおめでとうございます。フォトコンテンスト受賞者の皆様おめでとうございます。

阿武隈川の水系は 2 回くらい取材に来たことがあります。取材で。それですごくいい川だなと思っていたんです。今日本当に感動させていただきました。ありがとうございました。大変素晴らしい作品でした。

先ほど前澤さんのハンマー・ダルシマーとギターの音楽すごくいいです。写真と音楽ってすごく合いますよね。詩と写真がよく合うのと似ているかもしれない。音楽は本当よく合います。涙が出てくることもあります。さっき短い時間ですけど見させていただきましたが、自分のふるさとに帰ったような気がする。本当にいいところだなあとしみじみ感じます。福島は、二本松と三春に行きました。2 週間くらい滞在した時すごく良かったのを覚えています。桜が咲いている時期にも行きました。

今日は阿武隈川にちなむと言いたいんですけれども、私の故郷、今日も滋賀県から来たんですけれども、琵琶湖のほとりに関して。なぜ琵琶湖かと思わないでください。そのあたりでお話をさせていただきたいと思います。

琵琶湖ですけれども、湖とついているんですが、これは実は川の一部と考えていただいていいかと思います。流れているんですね。例えば諏訪湖とか十和田湖とか湖ってつく環境っていっぱいあるんですけど、琵琶湖だけが流れていると思います。

生き証人がいっぱいいます。一番有名なのがアユです。アユはだいたい川にしかいないんで

す。普通、湖に来たらすぐ酸欠状態になって死んでしまうんですが、琵琶湖のアユは固有種になっていて、琵琶湖だけで一生を暮らしているんですね。

もう１つ代表を挙げるならば、昆虫でサナエトンボというトンボがいるんですけど、サナエトンボっていうのも川に住んでいるトンボなんですね。琵琶湖が川に近い状態の湖であることを示す生き証人です。

琵琶湖の一番北が上流にあたります。その北が福井県になります。琵琶湖に向かって流れている名前がついている川が約 500 あります。一番南の突端のちょっと太い、地図で見ると太い線。これが淀川。淀川水系と呼ばれる大阪湾に流れる川ですけれども、その一本だけで外に出ているすごく簡潔明瞭な流れになっています。

一旦琵琶湖に集まるんですが、そこからオーバーフローした水が淀川水系になって大阪湾に行く。そんな感じです。川の力で流れているのもあるし、北の周りが豪雪地域で、そこの雪解け水の撹拌流でそれで絶えず動いている。あと、これは日本で湖として１つだけなんですけど、地球の自転の影響も受けているんです。地球の自転と反対側に水が動く。たらいを回すと水が反対側に動くのと同じ感じです。琵琶湖はそういう運動をしていて、いくつかの撹拌流によって浄化作用があるといわれています。

今、大津市を含めて相当数が琵琶湖の周りに住んでいるんですけど、どうして奇跡的に今まで綺麗に保たれていたかというと、自然の浄化流のおかげだといわれています。

今の琵琶湖はすごく厳しくなりまして、私の住んでいる湖西地方では二重ろ過が県から課せられています。１年間通して数回にわたりメンテナンスをするので、すごく高くつきます。その高いことをしないとそこには住めません。それは仕方ないかなと思っています。環境についてはすごく厳しい県で、特に淡水系。多分、日本で１，２位を争うんじゃないですかね。水関係の団体、自然保護団体などが非常に多いです。何か少し言うと、ドーっといろんな反応があります。せっけん運動とか菜の花運動。みんな滋賀県から出てきたものです。

今日は、琵琶湖の話をさせていただきますが、今日お越しいただいている方の中には、阿武隈川の環境に関心のある方々がたくさんいらっしゃると思いますので、少しでもヒントというか役にたつことを願って話をさせていただきたいと思います。「湧き水」がテーマなので、後で湧き水の話もさせていただきます。それと私は写真家ですので、持ってきている写真も見せたいのですが、それは後半で話します。まずは琵琶湖の話を聞いていただきたいと思います。

私が小学校の頃の琵琶湖は本当に豊かだったんです。全国津々浦々、淡水系がほぼ同じように豊かだったとは思うんです。私は昭和 29 年生まれなので、小学校４年生くらいに高度成長期、ちょうど東京オリンピックが始まった、そういう年代ですけども、小学校中学年くらいを境に琵琶湖が激変したんです。それを見てきました。

私は琵琶湖のほとりに住んでいて、その頃は遊び盛りで琵琶湖で遊んでいたんです。つまり琵琶湖が友達なんです。泳ぐこともですけど、魚を捕ったりいろんなことを。琵琶湖が友達な子どもたちが、一番よく琵琶湖を見ているんです。ですから、そこで変化に気づきます。

一番大きな変化は、最愛の魚がいなくなったことです。それは何かといいますと、「ニゴロブナ」です。これは琵琶湖の特産種です。皆さんご存知かもしれませんが、鮒寿司に使われる魚です。それは琵琶湖で一番多かったフナです。それが今、絶滅危惧種の第一種といわれる、保護種になってしまいました。琵琶湖で多いフナだったんです。

ヘラブナとかギンブナとかいろんなフナが

いるんですけど、ニゴロブナだけすごく際立った特性があります。それは何かと言うと、浅瀬にやってくるんです。雨が降った日に、琵琶湖から川を伝ってどんどん浅瀬を目指してやってくるんです。その行き先が田んぼです。浅瀬つまり「田んぼ」でした。田んぼに遡上してきたものを毎年捕っていました。だいたい４月下旬～６月にかけては忙しいです。小学生は学校に遅刻してもおかしくない。よく朝飯前といいますが、学校へ行く前にひと仕事１時間くらいで、フナをバケツで３杯くらいとりました。水が入っていない状態で３杯ですから５、６百匹入っていると思います。皆、卵を産みにやってくるんですが、それを捕ってたんです。

ところが、小学校５年生だったと記憶しているんですが、フナが来ない年があったんです。上がってこない年が。友達と話をしていたのを覚えています。その時うろ覚えですが、私の母親が「いやぁ楽になった」と言っていたんです。「雨の日に長靴をはかせなくていいからすごく楽になった」と言っていたのをよく覚えています。

どういうことかというと、雨が降ると、琵琶湖水系の川が増水したんです。それで、溢れてびしょびしょになるんです。小学校行くまでの道がびしょびしょになるんで長靴をはいていかなければならない。そういう感じだったんです。だから、長靴と雨の日はつき物だったんですけど、その年から増水しなくなったんです。

それはどうしてかというと、上にダムが出来ました。それと、その頃に「琵琶湖総合開発事業」が始まりまして、護岸の工事が始まったんです。一番大きなのがヨシ原を取り払って護岸にするんですね。今まで遠浅だったところをコンクリートにして、ヨシ原で何だか分からないようなところをコンクリートで分かり易くしてくれたんです。ここから陸、ここから湖という環境に全部してくれたんです。それで、ちょうど総合環境づくりが始まったころと一致するんです。

僕はその話は子供の頃体験したただの記憶で、まあそんなもんかと、何のこともなく、時々いろんなところで話をしていたんです。そしたら 15、6 年前に滋賀県に琵琶湖博物館ができまして、今、水族の研究者が集まっているんですね。それで、淡水系の特に生物の調査としては一番結構活発かなという感じがするんですけど、琵琶湖博物館ができてからいろんな調査が行われるようになりまして、それで結構意識が高くなったんですが、その中の一人の方が発見をしました。

それはなにかというと、ニゴロブナが卵を産みたくなるのはどういう時かという話です。どうも増水と関係があるようなんです。自分が住んでいるところが増水してくると卵を産みたくなるということを発見したんですよ。ヨシ原に産むんですが、ヨシの問題の前にその前に産みたくなる。それがすごく大事。それっていうのは小学生の頃の増水のことと結びつくんです。

さらに次の年に、何が分かったかというと、増水した水に泥水を流し込むとさらに産みたくなるということ。これは、田植えが始まって田んぼからの泥水が川に流れ、琵琶湖に注ぎ込まれる。そういう環境が産卵したい欲求を高めていたんです。これはすごいことですよね。それまではニゴロブナの絶滅はヨシ原の転居だとかばかり言われていたが、本当は増水である

とか濁っているとかそういう問題だったんです。

これはショッキングなことです。なぜかというと、形に見えないことだからです。例えば、人間が病気になって顔色が優れないとかではなくて、内蔵の問題です。外からは見えない。でも中から蝕まれている。そういうすごく怖いことが起こっていることが判明し、すごくドキッとしました。

僕は研究者に私が体験したことをお話したら、「まさにそういうことだろう」とおっしゃった。環境というのは怖いものです。形に見えることだけじゃなくて、内側から知らないうちに蝕まれている。それで、今に至っている。もうどうしようもない。琵琶湖はもうどうしようもないです。私自身が滋賀県に住んでいますので、そういう意味では堂々といえますけど、本当どうしようもないです。

皆さんは琵琶湖をどう捉えているか分かりませんけど、ブラックバスが一杯いて、外来種、固有種がいる。そう思われているかもしれませんね。で、県が駆除しているとか、そういうことを思われているかもしれませんが、そんなことじゃなくて本当にどうしようもない。うまくいっている試しが何もない。生態系が戻ってくるか、戻ってこないかは、全然今でも分からない。昔の環境とは程遠い環境です。自分の力ではどうしようないことがあって怖いと思いますね。

僕自身のことですけど、写真の仕事を始めた時に、さっき紹介していただいたように「里山」をテーマに 20 代後半から取り組んできたんですね。それで、最初は自分の地元の琵琶湖周辺の里山関係をずっと撮ってきたんです。最初、その中心的な環境として「田んぼ」ですね。その環境に注目して撮影してきたんです。京阪神、京都とか大阪の方とかは琵琶湖というのは写真のファンが大変多いので、「今森さん、なんで琵琶湖を撮らないんだ？」とよく言われました。僕は琵琶湖の作品が非常に少なかった。撮ってないから少ないのは当たり前です。それで 20 年ぐらい過ごしました。僕は、田んぼを撮っていて、琵琶湖を撮っているように思ってたんですね。琵琶湖と田んぼは意識的に繋がってたんです。あまり意識してなかったですが、外から見ている人は「なんで琵琶湖を撮らないんだ」と思う訳です。

それで、琵琶湖を撮ろうかと思いましたが、小さい頃から親しんできた琵琶湖のどこを撮るかと、これは難しいことで、なんというか上手く撮れないんです。写真上手な方が、自費出版されて琵琶湖の写真集を出しているんですが、その写真を見てもそれは私の琵琶湖ではないんです。綺麗には撮れてあるんですよ。でも、僕が体験した、自分の心の中にある琵琶湖ではないんです。だから、そういう写真は撮りたくない。僕は 1 人の写真家として琵琶湖をどう撮ればいいのかという時に、非常に難しい。だから琵琶湖は撮らなかったんです。それで長い間、田んぼなど里山関係を撮っていたんですね。

ところが、20 年ほど過ぎた時に 1 つの出会いがありまして。それは漁師との出会いでした。今は 80 後半になられるんですけど、当時はまだ 70 歳になったばかりでしょうか。たまたま私は出会ったんです。私が写真を撮っていたら、後ろから肩を叩かれ「何してるんだ？」と、「夕陽を撮っているんだ」と答えたら、「もっといい場所を教えてやる」と言うんです。それでおじいちゃんが教えてくれたんです。ちょっと遠そうだったから、僕の車に乗せてあげたんです。おじいちゃんが車に乗ったら魚の匂いが充満しました。すぐに漁師だと分かったんです。小さい頃に嗅いだ魚の匂いの記憶が蘇ったんですね。それが全ての始まりです。

そのおじいちゃんとすごく仲良くなって、そのおじいちゃんが琵琶湖では珍しい木の舟を操る漁師であることも分かりました。また、同じ年にもう 1 人の漁師に出会います。偶然にも

同じ年の方で、湖西と湖東でおじいちゃんと出会うんです。１人は田中三五郎さん、もう１人は福田さんという方です。それで、おじいちゃんがなんと道案内してくれたんですね。僕の場合、写真を撮るときは必ずそうなんです。きっかけを与えてくれるのは命なんです。人であったりあるいは動物であったりとか、生物であったりとか。何かこう、命との出会いがあって、その後に環境がやってくる。そういう感じですね。琵琶湖はまさにそうだったんです。おじいちゃんが琵琶湖の扉を開いてくれた。そんな気がします。

それであと２人とも木の舟を使う共通点がありました。あと、艫（ろ）を使います。これエンジンの船ではなく、２、３ｍある竹の棒を使って漕ぐんです。それで一応調査したら、なんとその２人ぐらいしかいなかったんです。これももう本当に偶然なんですけど。艫を使う漁師さんですね最後の２人だったんです。そのおじいちゃんが道先案内人になってくれて、私の記憶を紐解いてくれたっていうんですかね。小さい頃に自分が体験した心の琵琶湖にそのおじいちゃんがいざなってくれた。そういう記憶がありますね。

それで、そのおじいちゃんの何がすごかったかといいますと、そのおじいちゃんお２人とも、水の哲学というか、水に対する考え方を持っているんです。多分昔の漁師は皆持っていたと思うんです。琵琶湖の漁師って。今はそれがなくなったんだと思うんです。それに出会ったんですよ。生きた水って言葉あるんです。要するに「魚がとれる川は生きている、水が生きている」って言うんです。そういう表現を使うんです。そのお２人のおじいちゃんに共通しているのは「綺麗な水っていうのは、人間が飲むだけの水ではなくて、魚も住める水」だっていう考え方なんです。すごく確信視しているところがすごいなと思いました。

それで僕はどんどん深入りしていって、特に

田中三五郎さんです。西の方におられた。それで、10 年 20 年付き合うことになってしまったんですね。それで僕は結局、田中三五郎さんのいる集落に７年くらい通います。それで、さっき紹介していただいた「湖辺」という写真集。「みずべ」という言葉これは造語です。辞書で引っ張っても出てこないんですが、これは担当の編集者と考えました。それで、その写真の８割がそこの写真なんですね。そこに登場してくるのは田中さんというそのおじいちゃんです。

それで一緒に漁をして、舟も乗りました。結構楽しいことが一杯です。すごくおしゃべりの好きなおじいちゃんだったので、なかなか良かったです。その後、NHK で取上げて、Ｎスペでやろうかとなりまして、２年間ロケでカメラが入りました。それで、いろいろ撮ったんですけど、その田中さんがおしゃべりで、軽快で楽しく話すんですが、その中にピリッとくる言葉があって、なんとも胸を打つんです。それを必死になってメモしました。僕は写真集と一緒に「青い宇宙」というエッセイ集を出したんですけど、そのエッセイ集にその言葉を書いています。その田中三五郎さんからいただいた言葉。メモってる言葉を。全部そこに書いてあります。もし機会がありましたら見ていただければと思います。

そういうなんだか、宝石のような輝きを持っているおじいちゃんでしたね。それでずっと月日が流れて、ある時ですね、その田中さんが神

様のお祭、自分の蔵の中に神様が奉ってあるんですけど、そこにお供えをするんですけど、その行為に出会ったときに驚きました。それは多分この福島県でもあると思うんですが「田の神様」っていう、豊作のために田んぼの神様を奉るんですね。ところが、滋賀県の場合は淡水魚も取れるんで、豊作と豊漁ですね。その両方祝うんです。そういう神様にお祈りを捧げるんです。それの儀式として自分達個人個人で行うんです。その時に、ニゴロブナの稚魚を２匹取ってそれでお皿に入れてですね。そのお皿に少しお水を入れて、それでわざと横たえさせておくんですね。フナの口に半分水が浸かっているんですが、半分空気なんです。でもフナって酸欠に強い魚なんで、一昼夜くらい平気なんですよ。でそのままね、次の日まで生かしておいて、それで寝かせて。神様に捧げて、次の日帰してやるんです。そういう儀式なんです。

これは後でまた専門家に聞いた話ですけど、これはすごく珍しいことらしいです。淡水魚と田の神様が一緒になって奉るっていうのは、非常に珍しいらしいです。その時、やはりすごいのは、これはどこでもあることですけど。田の神様の、神様の相棒が山からやってくるんですね。山に住んでるんですよ。それは集落の遠くにかすむ山からやってくるんですよ。滋賀県の場合は、遠くにかすんでいる山っていうのはブナの森が広がってるんですね。そのブナの森からやってくるんです。ということは、これはやっぱり水を意識していることなんですね。水というものに対して、尊厳を絶やさないためにそういうものができたんじゃないかなと今考えたらそう思うんですけれども。神様がそこからやってくるんです。それで田んぼの神様と一緒になって、川の神様と一緒になって一昼夜過ごして、山に帰っていくってそういうことなんですね。ですから、田中三五郎さんが住んでいる集落は湧き水が出るんですね。

タイトル通り「湧き水の町」なんです。湧き水の恩恵を被っているんですけど。その湧き水がやってくる場所を田中さんは認識しています。森の大切さも認識しています。そういう不思議なことが結構ある訳ですね。なんかこう宇宙観というか、そういうものっていうのは環境問題には必要なのかなという気がしますね。あんまり具体的な話だけではなくて。なんというかこう、自然界を操れると思わないというか、畏敬の念というか、そういうものを持ち続ける強い心というか、今の若い、特に子どもたちはそういう心をどうやって持てばいいか、神様もいなくなってですね。

これは、ボランティアに参加したりとかありますよね。綺麗にしようとか。自然を。そういうことで、こういう大きな環境って守れるのかなと。いつも疑問に思いますね。そういうことでは守れないかもしれない。なんかこう人間の支配欲みたいなものがあって。そんなものに守れるものじゃないんです。精神性のとか。

受賞された方々の写真は素晴らしい。それが素晴らしいのはなぜかというと、僕はね、写真というのは、魂というか、愛情なんですよね。土地への愛情。それをお持ちの方でしかあのような写真は撮れないと思います。土地への愛情です。ですから地元にいらっしゃる写真家の方々が一番お上手なんですよ。それは当然ですが愛情があるから。同じような写真でも、実はちょっと違ったりする訳ですよ。ちょっと違うって同じかもしれませんけど、でもその裏が違いますね。撮られている方が違う訳ですから。その価値がすごく高い。そういうモノが土地を守るというか、こういう風景、自然を守っていくんじゃないかとそんな気がしますね。その１つの表れとして「写真」があると思うんです。

今、話をさせていただいた、湧き水の町の話とか、琵琶湖の話とか、田んぼの話もしましたけど、その様子をこれからちょっと映像でご覧いただきたいと思います。映像をご覧いただきながらちょっと説明させていただきます。

これは、琵琶湖ですね。この風景がどんな風景かというと、琵琶湖の東側から西側を見ているんですね。それで、向こうにそびえ立っているのが、比良山という山なんですよ。これは琵琶湖を取り囲む山塊の１つです。なんかすごく猛々しい感じに見えますけど、これたった1,100m位しかないんですよ。すごく低い山、低いというかそんな高くない山ですね。ところが、地形的にこういう風にガーっと削られたようになっているんで、こっちから見るとなんかこうアルプスを見ているような感じになりますね。長野県からやってきた人は本当それはアルプスによく似ているとよく言われます。ここは雪がつもります。それでこれ真冬じゃないんですが、真冬はこの比良山の半分位が真っ白になります。ちょっとこう、滋賀県には見えないような、そういう風景になるわけですね。手前はヨシ原です。

でこれは、そこに舟がありますね。小さい点と写っています。これ木舟です。それでこれに乗っておられるのが、田中三五郎さんという漁師なんですよ。これ撮らせていただいたんですね。今これ川です。川で左の方がすぐ琵琶湖なんですよ。琵琶湖の湖岸です。今これ緑の森に見えているのが、柳なんです。柳の森です。こういうところで生態系つくっているわけですね。柳の狭間にあるのがヨシ原です。これが、琵琶湖の原風景なんですね。でもこういう環境はもうほとんどないです。琵琶湖に２，３ヵ所位しか見られません。ここは大変貴重な場所になってしまいました。

私がこの風景に出会った時、今から 20 年位になりますかね。出会った時っていうのは。これ地元の写真撮る方も偶然ここ知らなかったんですよ。ここに行けなかったんです。この場所になかなか入れなかったというか分からなかったんですよ。なんか建物の裏側からしか見えなかったんです。ほんと偶然なんです。そこからしか見えない。すごくタイトな風景です。それでひょっとしたら見ていただいた方がいらっしゃるかも分からないんですけども、NHK スペシャルで第２弾でやった水辺ですね。「命巡る水辺」っていうＮスペで再放送も沢山されていると思うんですけど、そこに出てくる風景みんなここです。みんなここで撮ってるんです。この中で全部撮ってるんです。カイツブリが演奏したりですね、トンビがやってくるシーンとかみんなここで撮影してるんです。

これは、さっきのところのちょっと琵琶湖側ですね。向こうにある大木は柳です。この柳の

渕にですね、ノウルシという植物なんですけど、これ黄色い花に見えますけど、実はこれ花じゃなくて葉っぱなんですね。花の周りに葉っぱがある。ほんとの花は小さなテンテンテンとついてる。これらは春先に咲きます。なんか菜の花のような感じがします。

これヨシですね。なんとヨシはこういう風にとんがるんです。春先に針のようにとんがる訳です。ですから琵琶湖のほとりは「ハリ」っていう地名が多いです。ハリエとかハリサキとか。そのハリはどういうことかというと、このことです。ヨシの新芽のことです。

これはヨシ焼きですね。焼くんです。これは関東地方にもよく見られますね。河川敷で川のほとりで、ヨシが結構繁茂するところはヨシ焼きの風習っていうのは、各地で見られるんですけど、琵琶湖の場合はすごく大規模です。すごく規模が大きくて、飲まれるというか死ぬ人も出てきます。ぐるっと取り囲まれて、それで出れなくなる人が今まで何人かいます。これは3月頃ですね。野焼きがやってきたらもう春がやってきたなという感じがします。

これは田中三五郎さんという漁師。さっき言った艪ですね。竹の棒です。これで漕いでるんですね。これは大変難しいです。それでこの田中三五郎さん立ってますね。直立状態で操縦というか、やってます。これは難しいです。素人がやるとすぐコテンといきます。このぐらいの小さな木舟で立つというのは至難の技です。バランスが。それでこれなんで立っているかというと、魚影を見ているんですね。鯉とかフナとかがどこを通っているのか観察しながら進んでいます。

これは鯉です。でかいですね。これで体長70センチか80センチくらいあると思います。結構どっぷりとした鯉です。もうこれなかなか持ち上げられないですよ。これくらいになったら。それで今、大きなカゴの罠に入っています。これは結構頻繁に取れます。これは野鯉っていうやつですね。いわゆる普通の鯉じゃないです。

在来種。日本の淡水の中に住んでいた、もともと住んでいた鯉なんです。細長い感じでスマートで。ちょっとウロコが金色をしています。

これは、その田中三五郎さんの集落の中に湧き水が出てきてるんで、清らかな水が流れている。こうやって今でも、野菜とか洗うわけです。すごく綺麗です。緑は、セキショウモという藻なんですね。これがヒラヒラヒラヒラして綺麗ですね。

あの、セキショウモというとね、こんな思い出があります。ここを取材していて、さっき言ったテレビ班が入ってきてですね、このセキショウモが流れている感じを撮ろうと思って、写真を撮るだけだったら、１人で撮れるんで、まあそんな大袈裟じゃないんですけど。テレビが入るとなると数人でワーッと来るんで、なんとなく何をしているんだろうという感じになるんで、やっぱり撮影の前にお断りをしに行くんですよ。それでこの時も連合会長のとこに私行きまして、それでお断りをしたんです。そうしたら連合会長喜んでくれて、「あー、あんな川を撮ってくれるんか」と言ってね。それで「何月何日に来ますから」って言って約束したんですよ。そうしたらね、その日がやってきて、「撮影します」ってまた私その連合会長のとこに行ったら、「いや今森さん綺麗にしといたったでー」と言うんですよ。「えーっ」ってなんかその時僕悪い予感がしたんですよね。そしたらなんとこのセキショウモ全部むしってたんです。綺麗にしていたんです。あれはちょっと私、こう目がくらんで倒れそうになりましたけどね。物事っていうのはちゃんと伝えておかなければならないと本当あの時思いましたね。自分はいったい何に感動して、何を撮ろうとしているかっていうのをハッキリ伝えておかないと。この考え方の差っていうのは恐ろしいなと思いましたね。そういうことが今、それだけじゃなくて結構いくつかあるんですね。

これはヨシノボリですね。多分阿武隈川にもいるんじゃないですかね。僕らのところでは「トオヨシノボリ」っていいます。これは一番、流水をあんまり受けない、どちらかというと止水が好きな、そういうヨシノボリですね。それでこれは琵琶湖から上がってきてですね、水路にいます。それで、水路の中で卵を産むんですね。それで子育てするんですよ。すごいですよ。それであとね、集落というか家の中に湧き水が出るんですよ。なんとね、そこまで入ってくるんですよ。すごいですね。それでその井戸の中にね、増水の時ちゃっかりピュッと飛び越えて入ってくるんですよ。すごいですよ。それで田中三五郎さんの家の中に、いっぱい入っててね。それで田中三五郎さんが井戸をのぞくと、コイツね、上にあがってくるんですよ。チョコチョコチョコって。それでね、ニッコリ笑うんです。これは嘘ですけどね。ニッコリ普段から笑ってる、そのように見えるんですよ。それでね、こうやってね、三五郎さんがね、ピューッと手をかざすと、チョコチョコチョコってあがってきてね、ほんとにこう指をなめるようにするんですよ。それで私こんなこと言ってると、NHK

のディレクター「嘘だ」って言うんですね。その話をね。そして取材にきて、ほんとにそれが起こって、ビックリしてました。「いや淡水魚でこんなこと考えられない」って、たいそうビックリしてましたけど。でもまあ、このヨシノボリってなにが目的かっていうと、多分、三五郎さんそこで歯ブラシとか歯磨いたりとか、口をクチュクチュっとやるんで、その時なんかいろんなものがね、ヨシノボリのエサが出るんでしょうね。だから来てるだけだと思うんです。あんまり深い意味はないと思うんです。

これはね、さっき言ったコアユです。アユですね。琵琶湖だけに住んでいるアユ。これと同じ遺伝子を持っている稚魚を他の川に持っていくと、大きくなるんですよね。これはコケとか食べる。この琵琶湖にいるときはこの小さいままで生殖能力を持っているんです。コアユと呼ばれています。

これはね、カネヒラっていうタナゴの仲間なんですよ。これまた、この話をすると長いんでやめます。

これは、ビワマスです。多分琵琶湖って 60 何種類の淡水魚と 14 種類の固有種がいるんですけど、その 14 種類の固有種の 1 つです。ビワマスです。で多分琵琶湖の魚の中で一番美味しいです。これを食べた人は本当驚きます。お刺身にするとトロのような感じです。煮てよし、焼いてよし、なにをしても美味しいです。これに勝るものはない。ただまあ、保護種なんですけども、禁猟解禁になった時だけ、漁師の免許持ってる人だけに与えられるんですね。その権利が。ところが密漁が多いんですよ。私が大切にしているこの川は。密漁者の固まりです。ですから密漁者と仲良くならないとこの写真は撮れません。

これはその稚魚ですね。ほんとにあの、ヤマメとかイワナのような感じですけど。何か模様が付いていますね。

これはトビです。猛禽類ですね。琵琶湖には何種類も猛禽類がいますが、これが一番水辺でポピュラーな猛禽類です。

これは田んぼです。今見ていただいた琵琶湖のちょっと西側です。実は私の仕事場に近いところなんです。こんな田んぼが広がっています。

これもそうですね。これ朝の田んぼです。

これは、田植えの時ですね。棚田になってますので上から下に水がどんどん落ちていきます。多分右にいらっしゃる方はご夫婦でしょうね。向こうで奥様が早苗を準備されていますね。そうゆう風景です。

これはですね、ハルリンドウっていう青い花です。これはすごく沢山あったんですけど、今本当に少ないです。私も自生しているところあんまりもう知らないです。すごくおしいです。田んぼの圃場整備事業でことごとくなくなりました。今のこの写真の土手は、在来の土手ですよ。手掘りです。300 年か 350 年位前に手掘りしたのがまだ残ってるんです。そこは手堀りだったんで、前にあった土をそのまま使ってるんで、根っことか種が残って在来種で満たされてるんですね。整備事業で外から土を持ってくると全然駄目ですね。ユンボで固めちゃいますから。ガーンガーッって。あれするともう在来種はすっごい苦手です。土の中の空気がなくなって弱くなってすぐ衰退してしまいますね。

これなんかもう姿消してしまって。貴重な写真になってしまいました。

これはアマサギっていうサギですね。これ今ね、口に爪楊枝みたいなのありますけど、これミミズです。ミミズを食べているんです。

これはトノサマガエルですね。僕トノサマガエル大好きです。なぜかっていうとね、コイツあの、トノサマって偉そうな名前付いているんですけどね、農薬に弱くて、結構指標生物というか、コイツがいると安心です。ちょっと水が汚染されるとすぐにいなくなります。

これはお祭りの日のおじいちゃんですね。このへんは、お祭りにおみこしが出ている間、村の長老が集まってこのように社を守ります。

これは石仏ですね。こういう風景が沢山広がっています。

これは、春近い雑木林ですね。すごく世話をされている綺麗な雑木林ですね。

これギフチョウというチョウチョです。福島県とかこのへんメッカですね。このチョウチョ沢山いるはずです。カタクリという花も沢山咲いていると思います。

これは秋の雑木林です。

これは、ハサキといいまして、田んぼのアゼにこのように木を植えて、それで、竹を渡してですね、そこに稲を干すんですね。だからこういうのは沢山あったんですよ。20 年位前まではほんと僕らのところに沢山残っていて、ものすごく綺麗だったんですよ。ところが全部撤去されました。今この写真の場所も、7 年前に撤去です。撤去というか切られた。もう２度と植えられることはないです。このように農業の形態変わってくると、このように風景がなくなっていきます。

後半は、端折って恐縮だったんですけど、こんな感じで里山を私の方は見てきて、琵琶湖を琵琶湖と考えずに、川の流れというか、「琵琶湖水系」っていう風に呼んでいるんですよ。「琵琶湖」って私は言ったことがない。「琵琶湖水系」。ただ、そこを流れているっていう。それで、命の流れだと思っています。川を考えるっていうのは命のことを考えるっていうことだと思うんですね。それで、上流から下流に生き物はこういう風な運動しますから、人間のように横の運動ってあんまりするもんじゃないです。ただ川を考えるっていうことは命を考えるっていうことだと思ってます。川の流れは命の流れ、だと思っています。これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

クロストーク

写真家　今森　光彦 氏 ＆ 亀工房　前澤　勝典 氏

司会　今森様、大変すばらしいお話ありがとうございました。それでは、ここで、先ほど行われました表彰式のスライドショーの時に演奏をしていただきました、亀工房の前澤勝典様にも登場していただき、今お話いただいた今森様の講演内容についてさらに深くお話をいただきたいと思います。

なお、前澤様は、音楽活動を行う一方、生き物全般に精通するナチュラリストとして、以前は八ヶ岳南麓の名物ガイドとして活躍されておりました、より深い話が聞けるのではないかと思います。それでは、今森様、前澤様、どうぞよろしくお願いいたします。

前澤氏　今森さん、楽しい話をどうもありがとうございました。本日は、阿武隈川サミット 20 周年誠におめでとうございます。僕、突然出てきましたので、今簡単にご紹介いただいたんですけど、ちょっと自己紹介をさせていただこうかなと思います。

僕達は「亀工房」という名前で演奏活動しているんですけど、亀工房って、ちょっと変わった名前がついているんです。なんでそんな名前がついているかっていうと、僕がほんと子どもの頃から亀が好きで、いまだに全国あちらこちらの野外で、淡水に住んでいる亀の生態、どんな暮らしをしているのかという研究をしています。亀が好きなんで、それに繋がって蛇とかトカゲとかカエルも好きなんです。

そういった活動をしている中で今森さんとお付き合いをさせていただいているんですけど、ホント僕は昔から今森さんの大ファンで、何度もお仕事を一緒にさせていただいているんですけど、こうやって同じステージでお話させていただいて、非常に僭越なんですけど、今

日は今の今森さんのお話を受けて、さらにちょっと踏み込んだところで、僕の方から今森さんの話を紹介してみたいなと思います。

僕、ちなみに今長野県に住んでいるんですけど、僕の母親が福島県のいわき市の小名浜ってところの出身なんですね。だから僕半分は福島県人なんですね。それで、子供の頃から、母親の田舎に遊びに行くのが非常に楽しみで、小名浜っていうと港町ですからね。海もあって山もあって川もある。すごく自然の豊かなところだったんですけどね。そこでの自然体験が僕にとっての原体験の場所だったということで。今日は同じ福島県ということで、阿武隈川と絡めて聞けるんじゃないかなと思います。よろしくお願いいたします。

それでは、僕の方から先にお話をお伺いしたいと思うんですけど、琵琶湖が川のように流れているというのは、僕も最近、今森さんの著書で知ったんですが、やっぱり僕も亀の研究をする上で、琵琶湖の周りにはよく行っています。

琵琶湖の周りを見ていると、琵琶湖の湖自体には亀ってあまりいないんですよね。でもその周りの流れこんでくる川とか、周りのワンドであったり、内湖（ないこ）という琵琶湖の周りの池や、それに続く田んぼにたくさん亀が生息しています。まあそういったところで今森さんが、まず琵琶湖を撮る上で、田んぼから撮っていったというのは、今森さんの価値観の中に生

き物が沢山いる場所としての琵琶湖はまず「田んぼ」ってことだったんですかね？

今森氏　生物の用語で、「エコトーン」ってありますよね。あれだと思うんですよ。なにかの環境からなにかの環境へ移行する移行帯ですね。そこが結構環境では大事なんです。それはナチュラリストの中では当たり前だったんですけども、そういうものが一般的に理解されつつあるのかなという気はします。そこはエコトーンの一番中心なんで、どうしても僕田んぼから始まったのは生物の多様性がある場所から始まったということですね。それが、湖の表現にもなってたらいいなと思っています。

前澤氏　今その琵琶湖という大きなコア、地域のコアになるような自然があるということで、それはこちらで言うと阿武隈川がコアにあたるのかなと思うんですけど、川そのものだけでなくて、それに繋がる水系であったりとか、あとはエコトーンと呼ばれる環境というのが大事であるという事ですよね。

今森氏　そうですね。

前澤氏　琵琶湖っていうのは、海のように僕感じているんですけど、その琵琶湖に流れ込む川の下流と上流で住む生き物の生物相は変わってくるんですよね。それは海に流れ込んでいる川の上流と下流と同じように、琵琶湖と海は同じような関係ですよね。

今森氏　漁師は琵琶湖を「海」だと言いますよ。淡い海と書いて。「淡海（おうみ）」、海なんです。漁師にとっては。波が立ちますから。湖であんなに白波が立つところはないんじゃないかな。あの大きさの溜まり水というか、あの大きさになるとなんかこうちょっと変わるんですよ。琵琶湖は別格なんですよ。他の日本列島の中にある湖

の中では。まあ古代湖としては世界で一番小さいんですけど。日本になると日本最大でしょ。でも次のランクがすごく小さいんで、あれだけ大きくなると湖というイメージではないんですよね。風の影響も受けるし、周りの環境の影響を受け易いというか。だから面白いんだと思うんですね。

前澤氏　実際海も海流があって、流れている訳ですよね。世界中の海が繋がっていて、そこで海流ができて流れている。と考えると、まさに同じような。たまたま淡水であるか。海水であるかの違いだけですよね。

今森氏　さっき見ていただいて、ビワマスっていたでしょ。あの種が琵琶湖に気候変動が起こったら、一番先に絶滅するって言われている魚です。なぜかというと、琵琶湖って一番深いところで推定 100mなんです。そこは結構冷たいんです。地下水だけなんで。その下で過ごす稚魚ですからね。それで上ってきて、さらに遡上してそして下って、これを繰り返すんですよ。一番分布が広いというか垂直分布の幅が広いんで、よくイヌワシが環境においてすごく移動範囲が広いから生活範囲が広いんで、イヌワシが絶滅するんじゃないかと言われるんですけど、それ以上にビワマスの方が環境移動範囲が広いんですよ。ですから、雪解け水が供給されないと、下の所の地下水が撹拌されない。温度が高くなる。もうすでにそういうのが出ています。漁獲量とかを追ったりすると、そういう微

妙な変化っていうのは、わりと琵琶湖には如実に表れていると思いますね。

前澤氏　先ほどお話の中でありました、ニゴロブナの繁殖にあたって、泥水の時が一番誘発さ

れるというのがありますが、「治水」という考え方で言うと、人間の生活にとっては、治水っていうのは非常に大事なことだと思うんですけど。生き物にとっては、あまり治水してしまうと、例えば、流れを分断してしまうとあまりよくないという事もあったりするわけですよね。

今森氏　そうですね。そこは専門家の方もおっしゃってましたけども、永遠のテーマじゃないですか。人間が安全に住み易くするためには、やっぱりしなきゃいけないこともあるけども、それがまた、生き物にとっては都合が悪いこともあるし、そこも上手く両立というかそういうところが難しい、特に川の場合なんかは、どんどん変わっていくものじゃないですか。永遠のものじゃないでしょ。水域っていうのは。それを固定するってこと自体が、そこはなかなか難しい。長い目で見ると難しい。

前澤氏　よく氾濫する川は生き物が非常に豊富であるっていうことが。茨城県に小貝川という川があるんですけど、すごく蛇行した川なんですよね。有名な暴れ川なんですけど。その流域っていうのはもの凄く豊かなんですね。豊かな生物相が構成されている。亀も沢山いるんですよね。そういうところで上手くバランスをとっていくっていうのが、やっぱり今森さんのおっしゃるとおり永遠のテーマになっていくのかなと思いますね。

今森氏　今、おっしゃったとおりで、里山の多様性をもった川や池は氾濫を起こすって言われていますね。さっき琵琶湖のヨシの話をしたでしょ。ヨシがどんどん護岸になくなって、ヨシを植栽しようという話になったんですよ。名前なんだったかな。それ県がやってくれたんですけどね。もうなくなったんですけど。ここ10年くらい前まで続いていた、20年間続いたヨシの植栽運動っていうのがあるんですけど。ヨシをね、植えるんです。植えて、束ねて、ヨシがもともとあった所に戻していくんです。普通の植物だったら植栽したら根付くじゃないですか。ヨシは、全く駄目だったんですよ。根付かなかったんです。それが何故か長く分からなかったんですけど、それでヨシ財団ができて、基本調査が進んでいくうちに、すごいことが分かったんです。それがなにかというとね、なんとね氾濫した所にしかできなかった。

前澤氏　氾濫したあとにしかヨシが生えない!?

今森氏　氾濫した所にしか芽が出ない。そういう土壌条件にしか芽が生えない。すごいことでしょ？だから、環境自体をなんか作っていかないと。なくなったから植栽するという問題じゃなくて。これは生物を守るということ全部に共通するんじゃないですか？まずは環境を作ってあげるというか。そういうことですね。

前澤氏　そうですね。よくあるホタルを増やそうとかね。カワニナを放流すればいいかっていうと、なかなかそれが上手くいかなかったりすることもありますよね。

今森氏　うん。まあそれもありますよ。それでも、考え方は随分最近変わってきたと思いますよ。やっぱり環境、生き物を守る以前に環境を守ったら生き物って勝手に帰ってくるんで。ですからこの阿武隈川サミットは阿武隈川っていう環境がテーマになっているじゃないですか。だから僕いいなと思った。こういうところは、考え方の基本的な事がちゃんとなされているんじゃないかなと安心します。ここで、なんかすごく珍しい生き物がいて、それを守ろうと言ってしまうと、すごく偏った自然保護になってしまう。

前澤氏　それありますよね。

今森氏　川そのものを守る訳ですから。そこに人も住んでいる訳なんで。そういう考え方っていうのはすごく定着するといいなと思っています。

前澤氏　それを 20 年もね、続けてこられてる訳ですからね。

今森氏　うん。そうそう。

前澤氏　それで、今森さんの取材で琵琶湖をどうやって撮っていこうか、撮影していこうかという時に、その三五郎さんというね、漁師さんとお会いして、魚の匂いがしたというんですけど。昔はね、そういう方って沢山いたと思うんですよね。

今森氏　今は、いませんね。

前澤氏　もう土の匂いがした、魚の匂いがした方っていうのはね。

今森氏　それがね、独特な匂いなんですよね。分かります？

前澤氏　なんとなくちょっと、分かるような気がしますけど。

今森氏　これはね、独特な匂いなんです。フナとかタナゴの匂いなんですけどね。その匂いが充満するんです。個室に入ると。そういうのがね、懐かしいんです。僕にとって涙が出てくるような。そんな、小さい頃の記憶がブワーって。

前澤氏　匂いの記憶っていうのはありますよね。

今森氏　匂いの記憶です。それで僕イマジネーションが沸いてきたんですよ。写真ってそういうとこあるじゃないですか。なんかこう、多分写真撮られる方皆そうだと思うんですけど。なんかインスピレーションがないと撮れない作品というか。だから、そういうものに触発されて、そのエネルギーで撮りますからね。

前澤氏　でも、そういう方とコミュニケーション取っていくって難しいですよね。僕もあの福島のじいちゃんと子どもの頃に話をすると。僕は東京の下町で育ったんですけど。言葉分からないんですよね。おばあちゃんが通訳してくれる時もあったんですけど。結構、言葉が通じないというのは肉親でもありましたからね。

今森氏　それは私強いですね。地元っ子だから。バリバリの関西人だから。漁師の専門用語大体分かるんです。

前澤氏　漁師言葉ってありますよね。

今森氏　あります。あります。まあ、おぼろげに理解できてる。なんの違和感もないです。そのおじいちゃんと話していて。それが良かったかもしれませんね。大都市から来ていたら、ちょっとおじいちゃんも警戒していたかもしれ

ない。僕の話し方とか地についている。そういうことがあったのかもしれないね。打ち解けるのが早かったと思いますね。

前澤氏　そういう自然とともにずっと生きてきた人の物腰っていうか。独特のものがあると思うんですよね。うちの祖父もそうだったんですけど、ずっと農業やってきてその生き物との付き合い方というか、悪い時のあしらい方というのもあってですね。なんかマムシがいたりしてバッて殺すときがあったりするんです。でもまあ危なくないなという時は、こう放っておくとかですね。そういうのがやっぱり僕は間近で見ていて、自然との付き合い方っていうのを少しずつ学んだかなっていうのがあるんですよね。それがまた原体験になっていて、そういう方と接する機会っていうのが、これからだんだん難しくなっていくと思うんですけど、すごく貴重な、体験になるんじゃないかなと。

今森氏　今の作品を見ていただいたそのエリアにおいてですね、絶滅危惧種が何かというと人間なんです。そのおじいさんです。一番最初に保護しなければならないのは、本当にこれはおじいさんなんです。おじいちゃんが環境を支配している訳です。あのエリアはおじいちゃんが漁をするためにヨシを刈ったり、すっごい細かいメンテナンスをしているから、水鳥とかが住めるんですね。魚も遡上してくるんですよ。だからそのおじいちゃんの中に組み込まれている生態系なんです。

ところがね、あの時撮影した時も、高島市って市なんですけど、最初、市は理解が無かったんですが、保護するって話になったんですよ。けどその時ね、人間が出てこなかったんですよ。そこはすごくヨシ原が残ってるから、ちょっと人が入ってこないようにしようとか。そんな話になったんですよ。ところがそうじゃない。いかにそこを使う人をこれから絶やさないようにするか。やがておじいちゃんが後継者をつくる。そっちのほうが 100 倍大事なんですよ。それはね、ヨシの田中三五郎さんのエリアっていうのは、まさにそれ語ってくれる。

前澤氏　それはありますよね。山を管理していたおじいちゃんが 1 人亡くなっただけでも、その山がすぐに荒れてしまうとか。いろんなところでそういうことがあると思うんで。

今森氏　人の影響は大きい。人は大きい。

前澤氏　いかに後継者を作っていけるかってことですね。で、今の人達とその方を繋いでいくのもまた難しい課題だと思うんですけど。

今森氏　それで思うんですけど。さっきちょっと言ったんですけど、ボランティアじゃないんです。よくあの、僕らのところでヨシを刈るのもボランティアを募ってやりましょうっていうイベントがあるんですよ。自然保護でね。それで、市民の人が来て。まあそれはそれでいい行為ではあるんですけどね。撮影のときも言いましたけどね、愛着っていうか土地への愛情っていうか。そういうものとちょっと温度差があるんです。なんかこう他人事のように物事をやってる。それを孫の代まで自分が伝えるんだというそういう執念のもとにやってるのは、ちょっと執念のレベルが違う。その田中三五郎さんはそうですね、愛情が半端じゃない。そういう

エネルギーがこういう豊かな環境を守っていく中にはいるんだ。ただ、いない場合はあるから。市民参加の場合は、そういうことを考えなければならない。エネルギーをいかに高めていくか。今ボランティアがちょっと弱い気がするんですよね。団体で何を学べるかな。何かいいことをしたいなみたいな気持ちに一瞬なるんですかね。

前澤氏　いかに価値観を伝えていけるかが大事ですよね。

今森氏　ギブ&テイクで、何かしたら自然からもらうんだと。そういう考え方ですよ。なんかしてやる、肥料をあげてるんで、なんか助けてもらう。そういう感じになって、自分が働いて、相手からももらう。そういうものが含まれてくるのがいいんじゃないかなと思いますね。

前澤氏　そうですね。川を考えるっていうのは命を考える。その繋がりを考えていくってことだと思いますね。やっぱりその関心を持ちつづけるってことが、大事なんじゃないかなと僕なんかは思いますけどね。

今森氏　やっぱり僕は一番ね、川に関心ありますよ。今、田んぼなんか僕沢山撮ってきたんですけど、やっぱり背景には水の流れがありますね。水の流れがあるからこそ田んぼが潤ってる訳なんで、上から下に流れる川っていうのは一本筋が通るんですよね。それでそこにプラス生き物がそれぞれ、さっき前澤さんがおっしゃったようにいろんなパターンがある訳じゃないですか。そういう多様性が生まれてくる。環境の多様性が。そういう自然を学ぶ１つの舞台として川っていうのはすごく秀逸だと思います。

前澤氏　これからも阿武隈川サミットさんの活動を通して、地域の方々と、どういう関わり方がいいのか、ぜひ考え続けて、関わり続けていっていただけたらなと思うんですが？

今森氏　そうですね。たぶん今日来ている方の中には、実際に環境に対する働きかけをしてらっしゃる方がいると思うんですけど、僕はいつも里山的関わり方ってよく言うんですけど、それはギブ&テイクというか、なにかをやるんじゃなくて、生態系の中に入りこむ仕組みですよね。それをぜひ作ってほしいんです。子どもでもなんでもいいんです。なにか手伝っているだけじゃなくて、なにかそこから作ったものがもらえるとか。そういう少しでもいいから、生態系の輪の中に自分が入っているような、そういう仕組みの中に関わってほしいなと思います。手伝って綺麗にしているだけじゃなくてね。

前澤氏　ということでございますけども、なにか皆さんにとってヒントになるような言葉が１つでもあったらよかったかなと思います。今森さん今日は本当にありがとうございました。

今森氏　ありがとうございました。

司会　大変すばらしいお話ありがとうございました。今森様の記念講演では、琵琶湖を取り巻く自然と、そこで暮らす人々や生き物たちの暮らしぶりから、地域の自然のシンボル（阿武隈川）との関わり方を知り、考える機会になったのではないかと思われます。

また、今、行われましたクロストークにより、より気づきと学びの多い機会となったのではないかと思います。

今森さん、そして前澤さんにあらためて皆様、拍手をお願いいたします。

これをもちまして、「阿武隈川サミット20周年記念講演会」を閉会いたします。

発　行　日　　平成 27 年２月
編集・発行　　阿武隈川サミット実行委員会事務局